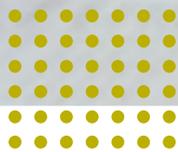


すべての子どもが 安心して学べる地域へ

— 障害の社会モデルに基づく
インクルーシブな学びの場推進事業 報告書 —

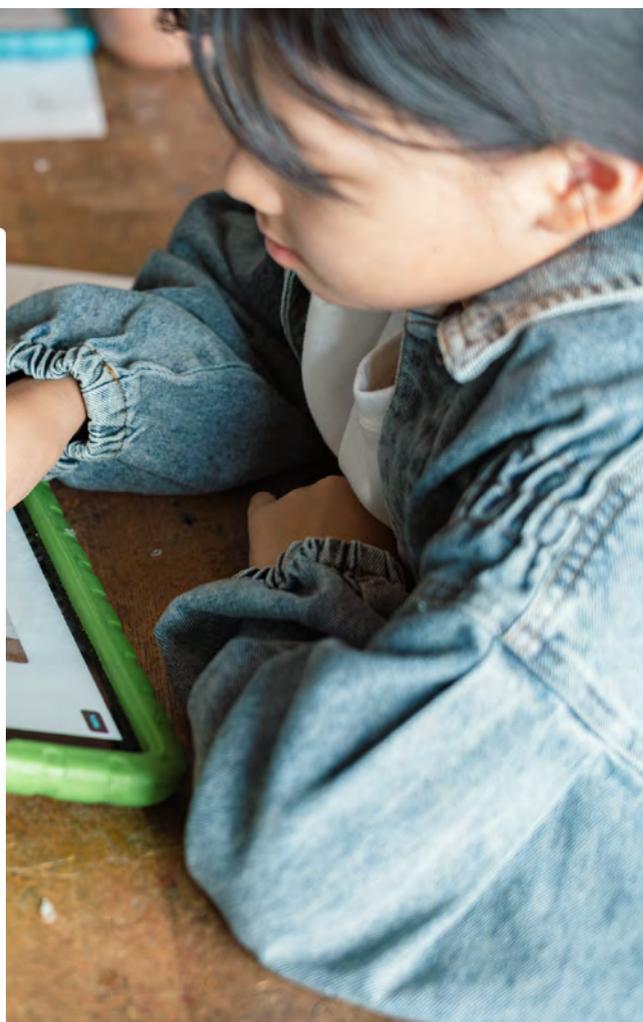
実施期間 令和7年7月～令和8年2月





もくじ

はじめに	—————	p1—2
事業概要	—————	p3
障害の社会モデル	—————	p4
活動ハイライト① OTDワークショップ	—————	p5—6
活動ハイライト② 第1回 活動報告会	—————	p7—8
活動ハイライト③ 第2回 活動報告会	—————	p9—10
活動ハイライト④ 成果報告会	—————	p11—12
課題とこれから	—————	p13
専門家の紹介・おわりに	—————	p14



ごあいさつ

「障害の有無を越えて、共に学び合う地域をつくる」

私たちは、「誰もが安心して主体的に生きることができる包摂的な地域社会をつくる」ことをミッションに活動しています。本事業は、障害を個人の問題(医学モデル)としてではなく、社会の側にある障壁(社会モデル)として捉える視点を大切にしています。障害のある子もない子も、同じ場所で共に学び、育ち合うことができる地域社会の実現を目指し、本事業を推進してまいりました。

これまでの背景 (訪問支援・教育連携など)

当法人はこれまで、訪問看護や児童福祉事業を通じた在宅・保育現場への直接支援、また山形県教育庁の外部専門家配置事業への協力などを通じ、教育現場の支援も実践してきました。

これらの日々の訪問支援を通して見えてきたのは、子どもが直面している「困りごと」の多くは、周囲の環境や制度、そして関わる大人たちの無意識な思い込みといった「社会的なバリア」に起因しているという事実です。このバリアを取り除くことこそが、インクルーシブな学びの場を実現するための鍵であると確信しています。

「SORAI SCHOOL」への伴走型支援開始の経緯と伴走型支援の概要

「SORAI SCHOOL(以下、ソライスクール)」は、株式会社SHONAIが運営している「ツクルで世界は変わる」を教育理念とするフリースクールです。コンセプトに「ひろげる・ふかめる・つながる」を掲げ、「ジブンもみんなも大切」を合言葉に運営されています。

ソライスクールでは、子どもたち自身が「やってみたい」と思うことから、学びを広げる「ジブンの学び」、仲間と協力してご飯を作ることで生活力や社会性を育む「ごはん」の時間、感じたことを作品やパフォーマンスに表すといった「表現」の時間がメインプログラムとして実施されています。子ども自身の興味や関心を起点に、地域や自然とつながる活動を通して一人一人が「自分の学び」をつくります。自身の学びが社会や世界を変えられることを学びながら、自己決定した活動の中で、自らの「居場所」を自らつくっていきます。

そして、そのソライスクールへ、私たち「やまごや」は、現場での具体的な解決モデルを構築するために、作業療法士(OT)による伴走型支援を開始しました。この支援では、単に専門家が助言をするものではなく、ソライスクールと共同で「インクルーシブな学校づくり研究会(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター主催)」に参加し、最先端の知見や先進的な取り組みを学びながら、社会モデルを基盤とした実践を共に積み上げてきました。

具体的には、作業療法士(OT)の専門的視点を活かした子ども理解や、ICT機器を活用した環境整備の導入など、スタッフと試行錯誤を繰り返しながら「すべての子どもが主体的になれる学びの形」を模索してきました。

本報告書では、これら、ソライスクールとの協働実践で得られた成果と気づきを広く地域の人々と共有することで、地域全体のインクルーシブ教育の推進に寄与したいと考えています。

事業目的

本事業は、障害の社会モデルに基づき、障害児を含む全ての子どもが安心して学べる環境を整備し、インクルーシブ教育を地域に広げることを目的とします。

- **共通認識の構築** 障害の社会モデルの理解を深め、課題を個人の問題ではなく環境や制度の問題として捉える視点を参加者全員が共有します。
- **実践力の向上** 教育現場における合理的配慮の具体的な提供方法を学び、実践現場での対応力向上を図ります。
- **支援ネットワークの構築** 地域の教育関係者、専門家、保護者等の連携を強化し、継続的な支援体制の基盤を整備します。

対象

教職員、保育士、特別支援教育関係者、保護者

実施期間

令和7年7月～令和8年2月

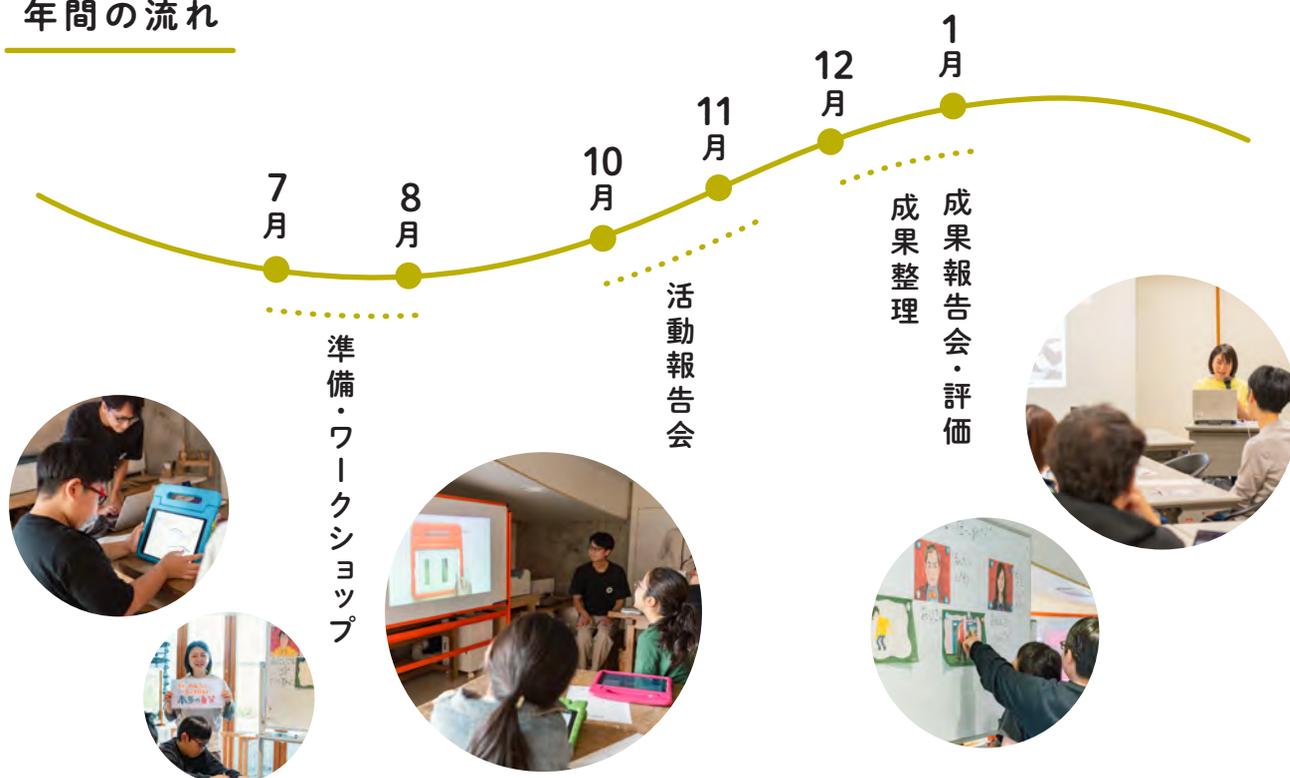
協力機関

SORAI SCHOOL／東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター／多機能福祉施設こもれび／学びプラネット合同会社／庄内子どもの居場所ネットワーク

主な活動

伴走型支援、ワークショップ、活動報告会、成果報告会

年間の流れ



障害の社会モデル

障害の社会モデルとは、「誰がどのように困り、理不尽な思いをするのかは、個人の心身機能によって決まるのではなく、社会が誰を中心に作られているかによって決まる」という考え方です。

個人モデルと社会モデルの違い

バリア(障壁)をめぐる3つの問いに対して、これまでの一般的な考え方(個人モデル)と社会モデルでは、以下のように回答が異なります。

問い	障害の個人モデル	障害の社会モデル
なぜ生じるのか？	個人の心身機能(足が動かない、目が見えない等)に原因がある。	社会が障害のない人に合わせて作られている偏りに原因がある。
どう解消するのか？	リハビリ、手術、人工内耳など、個人を治療・訓練する。	障害のある人に合わせて、環境を調整・変更する(合理的配慮)。
誰が解消するのか？	専門家の助けを借りつつ、本人が努力して解消する。	社会的に作られたものなので、社会の側に解消する責任がある。

社会モデルにおける「バリア」の正体

社会モデルにおいてバリアとは、「少数派がやりたいことを邪魔している、社会の側にある様々な要因」を指します。学校生活においては、主に4つのバリアに分類されます。

- ① 物理的バリア ———— 階段や段差だけでなく、集中を妨げるむき出しの蛍光灯や体育館の反響音なども含まれます。
- ② 制度的バリア ———— 分離教育や、特定の手段(例:手書きのみ)しか認めない校則・ルールなどです。
- ③ 文化・情報面のバリア — 音声や日本語文字のみの情報提示、「みんなで一緒に力を合わせるべき」という過度な規範などです。
- ④ 意識上のバリア ———— 「障害者はいつも手助けが必要だ」といった周囲の思い込みや偏見です。

なぜ「社会モデル」の視点が重要なのか

- 「自分のせい」だと思わないために 環境に適応できない子どもが自信をなくすのを防ぎます。
- 「自分の能力」と誤解しないために スムーズにできている人は、単に「自分に環境が合っているだけ」であると気づき、他者への低評価を見直せます。
- 公平な社会(学校)へ 「思いやり」や「やさしさ」に頼るのではなく、社会の偏りを反省し、制度や環境そのものをフェアな形に変えていく努力を促します。

活動ハイライト① OTDワークショップ

ゲームを通して考えるインクルージョン

開催日程

【日時】 2025年8月24日(日) 9:30～12:00

【会場】 庄内産業振興センター 第1研修室

【対象】 教職員、保育士、放課後等デイサービス職員、子どもの支援に携わる地域住民

目的

- ① **社会モデルの体感** ———— 障害を「個人の問題」ではなく「社会にある障壁(バリア)」として捉える視点を養います。
- ② **マジョリティ特権への気づき** ———— 多数派が無意識に享受している利益と、少数派が直面している不条理な構造を体感し、自身の先入観を点検します。
- ③ **対話の土壌づくり** ———— 支援者同士が共通の言語(社会モデル)を持つことで、現場での合理的配慮に向けた建設的な議論ができる基盤をつくります。



グループ対抗の「クイズ&ギャンブルゲーム」で、ルールに翻弄されながらも熱中する参加者の様子。



ゲーム終了後の解説を聞き、社会の構造的な不平等に気づきを得て深く頷く参加者の表情。

アンケート結果(抜粋)

参加者からは、これまでの研修にはない「衝撃」と「納得感」があったとの回答が寄せられました。

- **満足度** 参加者の85.7%が「大変満足」と回答。

- **印象に残ったこと** ・「当たり前が当たり前ではないことを体感的に理解できた。」
 ・「ゲーム終了後の解説を聞き、強い衝撃と怖さを感じた。自分も無意識にバリアを作っていないか振り返るきっかけになった。」

- **推奨意向** 参加者全員(100%)が、職場や地域の身近な人に「ぜひ参加してほしい」と回答。

OTDワークショップとは

OTDとは「Organizational Transformation by Diversity(多様性による組織変革)」の略称です。本プログラムは、多様性を力に変える組織づくりを支援する「一般社団法人OTD普及協会」が提供しています。東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターの研究成果(学術的知見)を社会実装するために開発されました。

「障害」を個人の特性の問題とするのではなく、社会の側の仕組みや多数派(マジョリティ)の無意識の前提に原因があるとする「障害の社会モデル」を、ゲーム体験を通して直感的に理解できるワークショップです。



具体的な現場の課題を「社会モデル」に書き換え、解決策を協議するグループワーク風景。

活動ハイライト②

第1回 活動報告会



開催日時・目的

【日時】 2025年10月17日(金) 16:00～17:30

【会場】 庄内産業振興センター 第2研修室(マリカ東館3F)

【目的】 読み書きに苦手さを感じる子どもたちが直面する「表現のバリア」を理解し、ICTツールを活用した具体的な合理的配慮と、子どもたちが自ら学び方を選択できる環境づくりの実践を共有します。

実践報告

ソライスクールにおけるICT活用プログラムの流れ

読み書きに困難を抱える子どもたちが、本来の主体的な表現力を発揮できるよう、iPadを活用した「デジタルシーカーコース」を導入したプロセスを報告しました。

① 導入:既存の「表現のバリア」を特定

ソライスクールの日常である「スクラップブック制作」において、手書きが当たり前となっている慣習が、書くことが苦手な子の思考や表現を制限している現状(バリア)をスタッフ間で共有しました。

② 実践内容:「デジタルシーカーコース」

「書くこと」を目的とせず、iPadアプリ「フリーボード」等を使用。子どもたちが自ら探究者(シーカー)となり、写真の取り込み、音声入力、スポット機能などのテクノロジーを「遊び」ながら発見・活用するワークを実施しました。

③ 結果:代替手段による表現

手書きでは判読が難しかったBさんは、テキスト入力や写真のレイアウト調整をスムーズに行い、集中して制作する姿が見られた。代筆が必要だったCさんも、自ら写真を選び、あえてカタカナ入力で楽しむなど、主体的な表現が生まれました。スタッフ側も「ICTは特別な支援ではなく、違いを尊重し共に学ぶための手段」であると認識を改める契機となりました。



専門家からのコメント

東京大学大学院 飯野由里子氏、学びプラネット 平林ルミ氏より、本実践の意義について深い洞察をいただきました。

「合理的配慮」と「環境の整備」の整理

今回の実践は全員に対して行われたため、法律上の「合理的配慮(個別の調整)」というよりも、事前の「環境の整備」にあたります。「自分だけ違うやり方なのは(目立つから)嫌」という子どもも多いため、「環境の整備」は適切な方法です。全体を調整し、それでも残るバリアに個別対応するというステップが重要になります。

「書けない子」を問題としない視点

社会モデルの視点では、問題は「書けない子」にあるのではなく、「書かないと表現できない環境」にあります。このバリアをテクノロジーで解消した点は、好例です。

子どもの能動的な意図への着目

読み書きが苦手でない子がタブレットを選んだ際、それを「楽しんでいる」と見るのではなく、新しいスキルの習得や表現の幅を広げるための「探究」という能動的な意図として捉え、対話を深めていくことの重要性が示されました。

アンケートより(参加者の声)

- **有効性** 回答者全員が、ICTを使った支援は合理的配慮の一手段として「極めて有効である」と回答しました。
- **主な気づき**
 - ・タブレットとノートに書くことを選択させて、ゆだねた方が学びが深まるという点が印象に残った。
 - ・ICTをいくら使っても対話は絶対に必要だと改めて感じた。
 - ・読み書きが苦手なお子さんを障害と捉えるのではない、という考え方に共感した。周りの環境、社会がそのことを障害にしているということだと思った。

まなプラキッズプログラム 概要

① 組織と目的

学びプラネット合同会社が提供する、読み書きに負担を感じている子どもたちが「自分に合った学び方」を見つけるための探究プログラムです。フリースクールや放課後デイ等の支援現場にコンテンツとノウハウを提供しています。

② デジタルシーカーコースの特徴

探究者(シーカー)としての学び
子ども自身がiPadを活用する方法を自ら発見するプロセスを重視し、試行錯誤する時間を大切にします。

身近なテクノロジーの活用

専門的で特別なものではなく、音声入力や読み上げ機能など、日常生活にあるツールを活用します。

大人と子どもの対話

指導者はICTの教え手ではなく、子どもと共に学び、対話する姿勢を重視します。

③ 本事業での意義

ソライスクールのスタッフも共にデジタルシーカーコースを子どもたちと一緒に取り組み、本プログラムを体感した。これは子どもたちと共に創るソライスクールの活動の中にテクノロジーを取り込むことにつながり、無理なく、iPadによる読み書きを日常の中に取り入れることができた。



第2回 活動報告会

開催日時・目的

【日時】 2025年11月21日(金) 16:00～17:30

【会場】 鶴岡市中央公民館 2階 第一会議室

【目的】 無意識の先入観が他者への「心のバリア」となっていることに気づき、目に見えない背景や事情を想像することで、共生のための感性を養い、具体的なアクションに繋がります。

実践報告 ソライスクールでの授業プログラムの流れ

NHK for Schoolの教材「クイズ!一番悪いのだ～れだ?」を用い、ソライスクールの小学3～4年生を対象に実施した授業のプロセスを報告しました。

① 導入:既存の「表現のバリア」を特定

登場人物の静止画を見て、第一印象を共有。「おじさんはゲームばかりしていそう」「おじさんは怒鳴っていて怖い人」など、見た目によるステレオタイプな意見が多く出されました。

② 展開:トラブルシーンの視聴と「犯人探し」

優先席でおじさんが座っているお兄さんを怒鳴りつける動画を視聴。「誰が悪いか」を問うと、多くの子が「優先席に座り続けるお兄さんが悪い」と答えました。

③ 核心:見えない背景を知る「心の電話」

教材内の演出「心の電話」を通じ、登場人物の隠れた事情(お兄さんは持病で体が動かなかった、おじさんは自分の経験からおじいさんへの配慮がないことに憤っていた等)を提示。

④ 結末:対話による視点の深化

事情を知った子どもたちは「誰も悪くない」「事情を聞けばよかった」「100%悪い人はいない」と、犯人探しを脱し、環境や背景を考慮した共生的な視点へと自発的に変化しました。



専門家からのコメント

東京大学大学院 飯野由里子氏、平林ルミ氏より、本実践の意義について深い洞察をいただきました。

従来の障害理解教育への問い直し

車いす体験等の「疑似体験」は、身体的困難を一時的に再現するに留まり、「大変だ、怖い」という負の感情を強化するリスクがありました。また、障害者を「困難を克服したヒーロー」として描くことも、自分たちとは違う特別な人という境界線を強めてしまいます。

「理解の順序をさかさまにする」革新性

本実践は、自分と違う少数派を理解しようとするのではなく、自分と同じだと思っている「私たち（多数派）」の中に含まれる多様性に光を当てています。このアプローチこそが、多数派が自分たちの特権や無意識の前提に気づくために極めて有効です。

「知らないことは、こわい」を解きほぐす

「多様性とは、まず聞いてみようという感性を育てることである」という指摘をいただきました。相手を知ることによって「怖さ」が解消され、言葉にできない困難を持つ他者に対しても、想像力を働かせることがインクルーシブな環境づくりの第一歩となります。

心理的安全性の重要性

子どもたちが既存の正解に縛られず、構造的な理解に至った背景には、ソライスクールの「間違っても大丈夫」という心理的安全性があり、それが学びを深める土壌となった点を高く評価いただきました。

アンケートより(参加者の声)

- **満足度・有効性** 参加者全員が、多様性を考える本プログラムについて「有効である」と回答。
- **主な気づき**
 - ・「『その人とわかれば怖くない』という言葉が、支援の現場でも共通する大切な視点だと感じた。」
 - ・「心の電話という演出は、授業だけでなく日常の対人関係の場面で活用できる共通言語になる。」

インクルーシブな学校づくり研究会 概要

① 組織と目的

本研究会は、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターが主催する、教育現場と研究をつなぐプラットフォームです。障害を個人の心身機能の問題ではなく、社会の側にある障壁(バリア)によって生まれるとする「障害の社会モデル」の視点に基づき、学校内のバリアを発見・解消し、誰もが排除されない学校づくりを目指しています。

② 活動内容と特徴

月1回の定例開催
教員、支援員、研究者が一堂に会し、ハイブリッド形式で継続的に学び合っています。

教材の実践と共有
「迷惑なのはだれ?」「車いすユーザーの社会」といった具体的な教材を現場で実践し、その効果や子どもたちの反応を詳細に分析・共有しています。

多様性理解の革新
少数派(障害者)を理解する従来の方法から、多数派(健常者)の中にある多様性を意識化し、困難を生み出している仕組みそのものを把握する「理解の順序をさかさまにする」アプローチを重視しています。

③ 本事業との連携と意義

NPO法人やまごやとソライスクールのスタッフがチームとして本研究会に参加しています。

共通言語の構築

「社会モデル」という共通の視点をスタッフ間で持つことで、子どもの課題を環境との相互作用として捉える視点が醸成されています。

伴走型支援の強化

専門家(飯野由里子氏・平林ルミ氏)からの直接的な助言を現場に還元し、具体的な合理的配慮の実践(ICT活用や環境調整など)に繋げています。

成果報告会

開催日時・目的

【日時】2026年1月24日(土) 14:00～16:30

【会場】鶴岡市マリカ東館 2階 庄内産業振興センター 第2会議室

【目的】本事業で得られた実践や学びを共有しながら、参加者が「インクルーシブな学校づくり」に向けた第一歩を踏み出すきっかけをつくります。「社会モデル」の視点を共有し、明日からの実践につなげます。

内容

- ① **開会挨拶・趣旨説明** — 開催目的とゴールの共有。
- ② **地域の活動紹介**
 - ・渡邊敦氏 — 庄内子どもの居場所ネットワークの活動
 - ・佐藤深喜氏 — 多機能福祉事業所こもれび「ふらっとるーむ」の取り組み
- ③ **これまでの活動の振り返り**
 - ・渡邊敦氏 BahnFusion SORAI — ソライスクールの概要と伴走型支援実施の背景
 - ・平向正包 NPO法人やまごや — 伴走型支援概要とこれまでの振り返り
- ④ **事業成果報告**
 - ・平向正包 NPO法人やまごや — 障害の社会モデルで読み解くソライスクールと作業療法士の実践
 - ・匹田加寿美氏 ソライスクール
- ⑤ **特別講演**
飯野由里子氏・平林ルミ氏 「『社会モデル』から始めるインクルーシブな学校づくり～明日からできる第一歩～」
- ⑥ **質疑応答** ⑦ **まとめ・クロージング**

地域の活動紹介

「庄内子どもの居場所ネットワーク」

不登校や貧困といった深刻化する子どもの課題に対し、官民の枠を越えた連携によって包括的な解決を目指すネットワーク。子どもと大人が「つながる」ことで救われる地域づくりを目指した活動を紹介しました。

「ふらっとるーむ」

酒田市、大学、福祉施設が連携し、大学生らとの交流を通じて不登校傾向の児童の不安を和らげ、学校を「安心できる場」にすることで、将来的なひきこもり防止を目指す取り組み「ふらっとるーむ」に関する活動の紹介がありました。

事業成果報告

ソライスクールの児童の変容から、学校とソライスクールを社会モデルの視点で分析した上で、ソライスクールスタッフと作業療法士の実践を報告しました。また、ソライスクールスタッフへのアンケートを通して、伴走型支援の可能性について言及しました。

- **学校環境におけるバリア** — 大人数の教室や一斉活動、手書きでの学び、および「みんなと同じ」を前提とする空気などが、聴覚過敏や書字困難を持つ児童にとって障壁となっていたのではないかと。
- **ソライスクールでの環境調整** — パーティションによる空間の構造化やタブレット導入による書字負担の軽減、視覚的なスケジュール提示など、物理的・情動的バリアの除去に向けた取り組みを実践。
- **行動の解釈と態度の変容** — 「問題行動」と見なされがちな行動を「不安の表出」や「感覚ニーズ」として作業療法士の視点で翻訳、また、プログラムと関わりを通して、ありのままを肯定する文化を醸成することで意識のバリアの解消に向けた取り組みを紹介。

これらのバリアの解消に向けた取り組みを通して、自己肯定感が低く、防衛的な「なりきり行動」で自分を守っていた状態から、料理での成功体験や自ら選んだ学習「ジブンの学び」への参加を実現し、意欲と自己効力感を段階的に育むことができたことと推測されました。そして、ありのままの自分で周囲へ主体的に関わり、協力し合える姿へと変化したのではないかと考えられました。

スクールスタッフのアンケートより

- 「自分自身の経験や習慣などで生成された価値観が、実は差別的なものだったりすることに気がつけた。」
- 「環境を変えることで、誰でもが参加しやすい場を作っていけるのだと実践や活動を通して感じることができた。」
- 「児童の特性や関わり方について客観的で専門的なアドバイスをもらえたことによって以前よりも考え方に幅が出ている。安心感につながっていると思う。」

特別講演

飯野由里子氏、平林ルミ氏より、「『社会モデル』から始めるインクルーシブな学校づくり～明日からできる第一歩～」として、以下の内容を講演いただきました。

① 「社会モデル」への転換

インクルーシブ教育の本質は、生徒個人を学校に合わせるのではなく、「教育システムや学校(社会)を個々の生徒のニーズに合わせて変革すること」にあります。その鍵となるのが「社会モデル」の視点です。

- **個人モデル** — 問題の原因を個人の心身機能や特性に求める考え方。
- **社会モデル** — 問題の原因を、多数派に合わせて設計された社会や環境に求める考え方。
どちらのモデルで捉えるかによって、社会や少数派への見方が「気の毒な人を助ける(チャリティモデル)」から「偏った社会を反省し変えていく」という姿勢に変化します。

② インクルーシブな環境を支える「両輪」

社会的障壁を除去するためには、以下の2つのアプローチを並行して進めることが重要です。

手法	合理的配慮	環境の整備
いつ	障害者からの要望を受けてから	あらかじめ(要望が出る前に)
誰に	要望した本人に対して個別に行う	不特定多数の障害者向けに行う
具体例	建設的対話を通じた個別の変更調整	施設のバリアフリー化、ルールの柔軟化、研修

「合理的配慮の提供の負担が大きすぎる」と感じる場合、それは事前の「環境の整備」が不足しているサインでもあります。

③ 子ども主体の「建設的対話」と実践のステップ

合理的配慮は、本人との「建設的対話」を通じて決定されますが、子どもには「困っている」という自覚が持ちにくいという課題があります。

- **要望形成の足場づくり** — まずはデジタル教科書を全員で使うなどの「環境の整備」を先行させ、体験を通じて自分と他者の違いやバリアに気づく機会を作ります。
- **Ex. デジタル教科書をクラス全員に配って使ってみる** → 「(自分は)読み上げだとよくわかる」「(自分は)拡大するとよくわかる」と自分で発見する。人と自分は違うことに気づく
「社会モデル」の視点から学校内のバリアを発見することが、インクルーシブな学校づくりへの第一歩となります。

アンケート結果(参加者アンケート)

- **満足度・有効性** 多くの参加者が「大変勉強になった」「勇気をもらった」と回答しました。専門家から保護者まで多様な立場が一堂に会し、意見を交わせる「貴重な場」として、事業の有効性が高く評価されています。
- **主な気づき** 「子どもが安心して過ごせなくしている障壁を、子どもと一緒に見つけていくプロセスにヒントがあると感じた。」
「インクルーシブな社会をつくるためには、まずインクルーシブな学校づくりが必須であると再認識した。」
「自分自身の人権意識を常にアップデートし、明日からより意識して子どもに関わっていきたい。」

成果と気づき

障害の社会モデルの視点から分析すること、つまりは、困難の原因を個人ではなく環境に求めることで、具体的な解決策(環境調整)が見出しやすくなる。そして、環境側を変えることで、その子らしい主体的な学びや社会参加の実現に寄与することができると考えられました。まずは、チームで、自らの当たり前を問い直し、「何がバリアなのか」を探し続けることが必要だという気づきにつながりました。

課題とこれから

本事業を通じて多くの成果が得られた一方で、インクルーシブな学びを広げていくための課題も明確になりました。

① 現状の課題とニーズ（最終成果報告会アンケート結果から）

- **リソース不足** 人員・時間・ICT機器の整備不足が環境整備を阻む要因となっています。
- **心理的障壁** 「特別扱い」への懸念や、学校現場・行政・関係機関との連携の難しさ。
- **継続性の欠如** 単発イベントではなく、日常的に学び・相談できる仕組みへのニーズ。

② インクルーシブな学校づくり研究会の活用

これらの課題解決には、前述した東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターが主催するプラットフォーム「インクルーシブな学校づくり研究会」への参加が有効と考えられます。月1回の定例開催を通じて、教員・支援員・研究者が具体的な教材の実践報告や分析を共有しています。作業療法士等の外部人材も含めた、自治体単位での参加が効果的と考えられます。

③ 伴走型支援の可能性

ソライスクールでの実践から、「伴走型支援」には以下の3つの可能性があることが示されました。

- **視点の転換** 定期的な訪問と社会モデルの視点による振り返りにより、スタッフが子どもの課題を「本人の問題」から「環境の問題」へ視点を移すきっかけとなります。
- **専門的知見の定着** 作業療法士(OT)等の専門的視点を日常に組み込むことで、行動の背景理解に基づいた具体的な環境整備につなげることができます。
- **組織力の強化** スタッフ間での対話・協働する機会が増えることで、個人のスキルに頼らない「チームの対応力」が強化されます。

今後は、インクルーシブな学校づくり研究会への参加と伴走型支援の普及を通して、社会モデルを基盤としたネットワーク構築に向けた活動を展開していきます。

専門家の紹介

飯野 由里子 氏



プロフィール

日本のフェミニズム研究者で、ジェンダー、セクシュアリティ、ディスアビリティ研究を専門としています。現在、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターの特任教授を務めています。障害の社会モデルに関する研究を深め、社会におけるマジョリティ性の壁を突き崩すための新たな思考の在り方を提示しています。教育現場での実践的研究にも積極的に取り組んでいます。

メッセージ

2022年11月に「みんなで作るインクルーシブ社会～庄内地域の挑戦」を共催して以来、当センターはNPO法人やまごやとの協力関係を継続してきました。この連携を私たちは非常に重要なものと位置づけています。「自助」や「自己責任」といった言葉に見られるように、私たちの社会では「個人モデル」の考え方がますます強まっています。そうした中、その対極にある「社会モデル」の視点を浸透させることは容易ではありません。しかし、この挑戦が庄内地域において、障害者を含む多様な人々が尊厳を否定されることなく、ともに生きる実践へとつながることを期待しております。

平林 ルミ 氏



プロフィール

言語聴覚士、臨床発達心理士、公認心理師であり、学びプラネット合同会社の代表を務めています。東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターの特任助教としても活動しています。学習障害や発達障害のある子どもたちへのICTを活用した学習支援が専門で、特に読み書き困難に対するテクノロジーを用いた新しい学び方の提案に注力しています。

メッセージ

自分と他者とはそれぞれに異なっていること、それは当たり前で、それぞれ尊重されるべきことだということを、子どもたちが生活の中で実感を持って感じることができる。地域社会がそういった場であるといいなと思います。NPO法人やまごやの活動は、それを庄内地域で実現すべく、日々活動されており、わたしもそこに一部でも参加できることをとても嬉しく感じています。この取り組みが、庄内から広がっていくように、これからの活動に期待し、自分自身も参加できればと思います。

おわりに

本事業は、「障害の有無を越えて、共に学び合う地域をつくる」という強い想いから始まりました。フリースクールでの伴走型支援や活動報告会を通じて、私たちは「社会モデル」の視点がいかに子どもたちの主体性を引き出し、関わる大人のまなざしを豊かにするかを目の当たりにしてきました。

バリアは物理的な段差だけではなく、私たちの無意識の思い込みや制度の中にも存在します。完璧なインクルーシブ教育を一朝一夕に実現することは困難かもしれません。しかし、現場での「小さな環境整備」を積み重ね、対話を通じたネットワークを広げていくことで、誰もが排除されない学びの場は確実に育っていきます。

この事業で構築された連携と実践知を基盤に、これからも庄内地域、そして山形県全体で、すべての子どもが安心して主体的に生きることができる包摂的な社会を目指して歩み続けます。本事業にご協力いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

すべての子どもが安心して学べる地域へ
障害の社会モデルに基づくインクルーシブな学びの場
推進事業 報告書（令和7年7月～令和8年2月）

令和8年2月発行

（発行者）

NPO法人やまごや

〒997-0015 山形県鶴岡市末広町5番22-201号
マリカ西館2階C-1

Tel: 0235-29-2117

Fax: 050-3852-1225

Mail: contact@npo-yamagoya.org

（助成）

やまがた社会貢献基金（イオン・さくらんぼWAON子どもの健全育成支援事業）

（企画・運営） NPO法人やまごや（池原恵美 齋藤ひとみ 白幡祐子 平向正包）

（写真） 大瀧 香奈子 FUNE

（デザイン） 宮城 妙 humming DESIGN

本冊子の写真、文の無断転載、コピーを禁じます。内容に関するお問い合わせは、NPO法人やまごやまで。



Webサイト

